

第六回

アジ研図書館で、シンガポールの戦後史を深く旅する

鍋倉 聰

シンガポールという、アジア最先端の社会をもとに社会学研究を進めるにあたって、アジ研図書館を活用しています。

日々変化するシンガポール社会の最新状況については、現地調査やインターネットを活用することによって、フォローすることができません。こうしたなか、当館では、それでは捉えられないこととして、最先端社会に至るまでの歴史的な積み重ねを掘り下げるべく、戦後の現地紙をマイクロフィルムで読んでいます。

シンガポールは、一九六五年に成立した新興国家で、歴史的な積み重ねは興味深くないと思われがちです。一八一九年に英国東インド会社のラッフルズが上陸して植民地建設が始まった時から数えても、二〇〇年に達しません。

他方、シンガポールは、たいへん興味深い社会でもあります。華人、マレー人、インド人、その他という、人種的・民族的・文化的背景の異なる人々から成る、多人種・多民族・多文化社会であると同時に、これらの人々の八割以上が、住宅開発庁という団地当局の下にある団地に暮らす「総団地化」社会でもあるのです（鍋倉聰「二〇一一」『シンガポール「多人種主義」の社会学』、世界思想社）。

歴史的な積み重ねがあまり重視されないシンガポールですが、このように興味深い社会が成立するにあたっては、その積み重ねを無視する

わけにはいきません。シンガポール社会が現在あるように至る歴史的背景を追究すべく、当館で現地紙を同時代的に読んでいます。

「シンガポールの成功」とよくいわれるように、リー・クアンユー初代首相率いる人民行動党（PAP）のもと、シンガポール政府が行ってきたことは讃えられてばかりですが、それはあくまで結果論に過ぎません。「成功」に至る過程では、様々なことがありました。

リー・クアンユーの野党新人議員時代や、PAPがまだ権力基盤を確立していないのが、一九五〇年代から六〇年代にかけてのシンガポールでした。マレーシアの成立とシンガポールの分離やインドネシアとの対立のなか、揺れていたのが、当時のシンガポールだったのです。

こうした明日どうなるか分からない当時の朝、現地のコピ店（コピーショップ）で、新聞を広げていた人々や、新聞記事をもとに熱く議論していた人々の隣に座り、コピー（ブラックコピー）を飲みながら新聞を読むような状況に、自分自身を置くことが理想的です。

もちろん、タイムマシンでも使わない限り、このような状況に自分自身を置くことは不可能です。しかし、理想的な状況にできるだけ近づいて現地紙を読むことはできます。そこで有効なのが、マイクロフィルムを使って、現地紙を読むことなのです。

実物の古紙を今さら積まれても、扱いが大変です。インターネットは、接続に余計な時間がかかるうえ、記事が分断されて連続性に欠けます。検索機能を駆使しても、精度を欠き、肝心の記事がなかなかヒットしません。

一方、マイクロフィルムでは、当時の時間の流れに近いペースで、次のページにどんな記事が出てくるのか、わくわくしながら、現地紙を順に一枚一枚読むことができます。アジ研図書館で、いわばシンガポールの戦後史を深く旅することができるのです。

また、研究者の立場としていえば、研究上有用な記事は、その場でプリントアウトして手もとに置くことが欠かせません。後から再度記事を探してコピーするのは、新聞記事の場合は容易ではありません。

シンガポールの現地紙に関して以上記したことを唯一満たしてくれるのは、私の知る限り、アジ研図書館しかありません。日本の国会図書館は論外として、シンガポール国立図書館は、資料自体は豊富に揃っているものの、閲覧やコピーする設備や環境は、当館に及びません。

こうして、当館のマイクロフィルム再生機を活用させていただいております。単に読むだけでは不十分ですので、この結果を論文や著書などで還元していくつもりです。

アジ研図書館におかれましては、素晴らしい設備のもと、これまで蓄積してきた豊富な資料を活かして、アジア一の図書館を目指していただきたいと思います。

（なべくら さとし／滋賀大学経済学部准教授）